

## 六つの提言

澤

英武

● 理事  
外交評論家



澤英武理事

司馬遼太郎の『台湾紀行』の冒頭部分に、台湾へ向かう機中で読んだ一冊への考察が記されている。

その一冊とは、楊威理著『ある台湾知識人の悲劇』（岩波書店・同時代ライブラリー）。中国と日本、二つの祖国のはざままで苦しみ、蒋介石のいわゆる白色テロの犠牲になった学友、葉盛吉の伝記である。

葉盛吉と楊威理はともに台湾出身で、戦時中、仙台の第二高等学校生徒だった。葉は終戦後、大いなる希望を抱いて台湾に帰国、医師として復興に情熱を傾けるが、やがて支配者、国民党政権の圧政腐敗に絶望する。大陸を支配した中国共産党に幻想を抱いて入党、党籍がばれて逮捕されるのである。

戦後の第二高等学校を卒業した私にとって、葉・楊両氏は先輩である。二高時代の山仲間と

二年前、台湾旅行をしたおり、台南にある葉盛吉の墓参をした。成功大学の教授をしている遺児、光毅氏が案内してくれた。墓前に二高校旗を掲げ、光毅教授と一緒に二高校歌を斉唱した。父盛吉が獄中にあるとき、光毅氏が生まれた。盛吉は我が子を見ることなく処刑された。

一九九〇年、楊威理氏がようやく盛吉の遺族を探し当て、電話したとき、光毅氏は受話器のむこうで、たかだかと二高校歌を歌った。光毅氏は二高寮歌集のテープを入手、校歌を覚えたのだという。

『ある台湾知識人の悲劇』に示された葉盛吉の苦悩は、李登輝総統が司馬との対談で述べた「台湾人に生まれた悲哀」に通じている。当時の世相とも考え合わせ、胸が締め付けられる思いである。

ところで、『ある台湾知識人の悲劇』は入手不

可能になってしまった。岩波書店に何度注文しても、「絶版」の冷たい返事があるのみである。中国政府の気に入らない内容だからだろうか。

台湾を訪問し、台湾のだれかれと話すたび、心がひろびろと落ち着き、思いのままでも語れる喜びを味わう。そこには、良きにつけ悪しきにつけ、日本人と台湾人が半世紀にわたって一緒に生きてきた歴史と文化、そして皮膚感覚が存在しているからかもしれない。それは韓国ではありえないこと。中国ではなおのことだろう。

李登輝前総統にお目にかかり、お話をうかがうたび、そこに、旧制高校時代を共有したやすらぎを感じるのである。

私は、中国問題の専門家ではないが、大陸問題研究協会のメンバーとして、日本と台湾の学者の研究会議にしばしば参加してきた。同研究協会は、田中角栄首相の日中国交・台湾断交を憂慮する学者たちが設立、日台両国の学者が研究活動などを通じて、信頼の絆を維持強化する努力を続けてきたものである。

同じ中国研究者仲間でも、台湾問題がからむと、中国の顔色をうかがう、良心不在とも思える学者が透けて見えて面白い。

今年初め、東京財団の委託で私は数人の学者と共同研究して、「日台関係強化のための六つの提言」を発表した。日台両国民の間の親近感  
は他に類を見ないにもかかわらず、中国のおどしにおびえる勇気のない日本の政治家への指針  
としたい、との考えからである。

やる気なら、今すぐにも可能な提言ばかりである。それを列挙する。これが私の運動目標である。

- 1 日台間で、FTA（自由貿易協定）交渉を直ちに開始せよ
- 2 「日台安全保障フォーラム」を設立せよ
- 3 政府・政治家交流のレベルアップを図れ
- 4 「日台文化交流センター」を設立せよ
- 5 国際組織への台湾加盟を積極的に支援せよ
- 6 外国人登録証に「台湾」を明記せよ